

# 父を語る



## はじめをつける

芳賀 敏郎

父の思い出として何を書こうかとまよふ。廻りの人からは、「厳しくて、こわかった思い出が真っ先に出て来る」と見えるだろうが、そうではない。しばしばしかられ、時にはなぐられたこともあったが、それでひがんだり、いじけた気持になった憶えはないし、悪い思い出にはなっていない。母や祖母のやさしさとがうまく調和していたからだろうか。

口で言われたことより、日常の生活から得たことが、無言の教訓として強く心に残っている。一番強く残り、私の処生に影響を与えているのは、「公私のケジメをはつきりつけ、私利私欲のために行動しない」ということである。父は、現在の政治家とは全く逆の生き方を最後まで貫き通したと思う。NHKの用度課長をして

いたとき、業者から中元の類がとどくと、送り返したり、呼びつけて引き取らせたりしたのを憶えている。業者としては取扱いにくい相手であり、課員の中にはとまどいを感じた人もいたことであろうが、次第に皆の信頼を得て行つたことが想像できる。数年前、私は数億円のコンピュータの機種を私の判断で決めることになった。他社では、いろいろの筋から意見が入り、もめることも少なくないと聞いているが、私の場合は、どこからも拘束されないで、全く公正に比較評価することができた。父の影響を受けて、「公正に行動する」という二十年余の実績から、「芳賀さんが良いと判断したなら異議ありません」と皆が言ってくれたのである。

自分が年をとつて来ると親の気持が少しずつ分るようになってくる。中学校や高校への進学に際しては、期待に添い得なかった。米沢高専を卒業した昭和二十三年は戦後の経済危機の最中で、とても進学など考え

## 最高の贈物

芳賀 普子

られる状況ではなかった。私の進学をあきらめさせるために、「東大なら受験しても良い」ということになった。ところが、偶然にも合格してしまった（高専からの受験生七十人のうち、合格は私一人だけだった）。このときの父の気持は複雑だったと思う。経済的にどうしようという気持と、自分が一高東大を目指し、果たせなかった夢を息子が果たしてくれた喜びと、今自分も親となつて考えると、恐らく喜びの方が大きかったに違いない。潔叔父さんの御援助を得て、何とか大学へ進学することができた。

大学を卒業して、民間会社へ就職が決まったとき、父は私を研究者にさせられなかったことについて負い目を感じていたようである。あとになって、私が会社を止めてどこかの大学へ行くという話を、積極的に支持してくれた。

今日（昭和五十五年九月二十二日）私の博士論文の子備審査が終り、来年三月頃には何とか博士号がもらえる見通しがついた。また同じ今日、慶応大学医学部の教授会で私の採用が議題にのぼっており、来月の教授会で正式決定される予定である。あと一年半生長きしてくれたら、心から喜んでもらえたのに残念である。

「おじいちゃん」そう呼びかけることができなくなつて、間もなく一年になろうとしている。折ある毎になつかしく、慕わしく思うこの頃である。

「おじいちゃん」

無言で呼びかけると、鮮かに浮かび上るおじいちゃんの笑顔がある。それは今から二十五年前、七月末の暑い日であった。長男耕一の誕生を祝って、お父さん、お母さんお揃いで当時私達が住んでいた市ヶ谷の社宅を訪ねて下さった時のことであった。耕一の寝顔を覗き込むお父さんのその嬉しそうな笑顔、私が初めて接した日本晴の笑顔であった。その後は、大勢の孫に囲まれた嬉しそうなおじいちゃんに接することも珍らしくはなくなつたが、

私にはあの日の笑顔が忘れられない。

目を閉じると、さまざまな情景が浮かんでくる。

お正月に、全員上溝に集まつての賑やかな食卓、おじいちゃんを中心にとめどもなく弾むおしゃべりの数々、おばあちゃんを囲んでの楽しいトランプ遊び、碁盤に向かうおじいちゃんの真剣な表情、上溝中学校の校庭